Piece to Peace

パウリの甥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｉｅｃｅ　ｔｏ　Ｐｅａｃｅ

【Ｎコード】
Ｎ９１８８Ｚ

【作者名】
パウリの甥

【あらすじ】
一人の麗しき女性を巡って四人の男たちが踊る悲喜劇・・・
感情では足りなくて、理性では語れなくて、本能では知ることのできない・・・何が正しく、どうしたら赦されるのだろう？
本作品は志保さんを中心にした逆ハーレム（？）なお話です・・・
このような設定、もしくはキャラクターの描き方が受け入れられな

いかたはまわれ右を推奨します・・・

Ｓｃｅｎｅ　１．０：現と夢（前書き）

勢いで書いてしまった連載ものです・・・こんな作品を読んで頂き有難うございます・・・ただし、作者が筋を確定していないのでどんな物語になるかは皆さんのご意見や感想等で大きく変わるかもしれません・・・

では、どうぞ！！

Scene 1．0：現と夢

”桜の花びらが吹雪のように舞う中で、僕は彼女に恋をした・・・・”

”それは、世界の理をいやそんなものではない自分の価値観そのものが揺らいでしまうぐらいのものだった・・・・”

”月並みの言葉しか思い浮かばない・・・けど、彼女の為になら何もかも捨ててしまってもかまわないとそう思ったんだ・・・・”

”世の無情さを知り、日々のモノな生活に浸るとそんな理想などケーキの上にまぶしたパウダーシュガーのように儚く、またほんの少しの因子で崩れ消え去るものだ・・・ならば、己を大事にし己の為に生きるのが賢く、また利にかなっている。”

なら、声を大にして叫ぼう・・・・彼女が僕にとっての”世界”であり、全t・・・

「あら、新しい作品の下書きかしら？あなたにしてみたら、随分

と可愛らしくて素直な文章ね・・」

女はいつの間にか、俺の後ろに来ていたようだ・・・こういう気配を消すところや皮肉をいうところは最初はあまり好きではなかった・・・ただ、時を重ねるうちにそこすらも愛おしいと思ってくるのは何の幻覚作用なのだろうか？そうして思わせぶりな態度を口調の端々に込めて、柔らかく甘美なそれでも行く先は生き地獄・・・ともいうべき白き肢体を俺に擦り付ける・・・媚びるように、または俺を憐れむように・・・

とある大都市の繁華街に君臨する、翡翠の女王・・・・人は彼女のことをこう云う。まるで、この世の男は自分の為にありそれは一重に奉仕するだけの存在・・・と言わんばかりの不遜で、高飛車で・・・けどそこには高貴と、怜悧が相まって・・・単なる女の枠を超えている、ある意味規格外な人間だ・・・

その容姿に惹きつけられる奴が大半だが、中にはこのどうしようにもならない性格が好きな輩もいるようだ・・・・

そういえば、同じ作家仲間の服部は

「あの、どうしようもないぐらいのツンデレぶりがええねん？わかるかぁ～平成のコナン・ドイルさん？」

そもそも、同じ推理小説家のクセして「最近、売れ筋がエエから

のう」の一言でラノベ作家に転向しやがったアイツは殊、ツンデレやらヤンデレやらと女性を何かの型にはめようとしている・・・これも、奥さんに先立たれてしまい男手一つで息子を養わないといけないからなのだろうか・・・・・

昔は、小説家の大家でもある父親を超えてやると息巻いており一心不乱に作品を書いているうちはよかった・・・ただ、父親を病で亡くしてからは目標と目的を失い酒量も増え自棄になる一方・・・・・それでも、奥さんの和葉さんとは上手くいっていたようだが生来、身体が弱かった彼女は一人息子を産み落とすと残されていったこの色黒男を心配するように世を去って行った・・・・

それから、件の歓楽街に繰り出し色々悪い噂が絶えない中その「彼女」に出逢ったそうだ・・・・

それから、崩れるのはいとも簡単だったそうで・・・と”彼女”は事も無げに語った・・・

俺は、最初は服部をそそのかしたのはこのオンナのせいだと決めていた・・・確かに、酒におぼれ誇りも夢も失いはしたがけど自分の信念(かずはさん)を捨てるはずがないとそう思っていた・・・・

なので、俺は単身あのオンナの”拠点”に向かっていったのだ・・・

・・・

・・・・・きて、・・・・・どうくん・・・・・・起きて、・・・・・・

靄がかかっているみたいだ・・・・意識が浮上することを本能で拒む・・・・・・

「起きなさい、工藤君!!」

はっとなり目を覚ます・・・・白い空間にポツンと置かれたダブルベッドとサイドテーブル・・・光が遮光ガラスすらも透過してい

るのではというぐらい光がこぼれている・・・・

・・・・・夢？・・・・・

「起きなさい、工藤君？今日は初日でしょ、脚本家がいなければ舞台はご破算になるわよ・・・」

「翡翠の・・・・女王・・？」

「は？何寝ぼけているの工藤君？それとも、頭の中はもう仕事モードな訳？江戸川センセイ？」

「あっいや・・・・済まない少し寝ぼけていたんだ・・・・志保・・・」

「ちょっと、昔馴染だからっていってファーストネームやめてくれるかしら？それに今は何もないでしょう？工藤君・・・・」

「っあああ・・・・昨日は夜遅くまで有難うな・・・若手実力派女優さんの意見も聴けてよかったよ」

そう、彼女・・・宮野志保。芸名、灰原哀。モデルから始まって、その容姿と見る者を惹きつける雰囲気と卓越した演技力で既に二十代初めで実力派女優の仲間入りをしている・・・・その他を圧倒するオーラと理知的でかつ聡明な眼差しから彼女のことを「翡翠の女

帝」や「極東の至宝」と・・・まぁ、有りがちな表現では足りないぐらいの通り名や惜しみない賛辞が与えられている・・・・

そして、オレにとっての初めての女性(たいせつなひと)だったし初めての相手でもあり・・・これからも変わることはないだろう・・・・

オレ、工藤新一と宮野志保、そして高校の同級生だった黒羽快斗、大学の演研で知り合った服部平次は昔からの俳優仲間だった。ただ、オレ一人演劇の才に恵まれなかったこともあり今は脚本家でなんとかこの世界に残っている・・・・

ただ、オレが俳優をあきらめ脚本家になって暫くして志保との距離は遠のいていった・・・今では脚本家と女優という細い繋がりだけ・・・・

Piece to Peace ―Scene 1. 0：現と夢

Imitation to Truth

この前の打ち上げもそうだったが先の二人に加え、二世俳優の白馬なんとかというやつも彼女のことを虎視眈々に狙っていた・・・・共演者しかもヒロインとその相手役ということもあり確かに、二人が会話をし微笑み合っている姿は「様になっている」し、誰からみてもお似合いな二人でもあった・・・

「ほんと、白馬のヤロー！あんなに志保ちゃんべったりで・・・」
「なら、お前がアタックすればええのに？のう、工藤？お前からもなんか言うたれや・・・」

「しらねぇし、興味もねぇ・・・そもそも、オレはアイツのモノでも無ければ、アイツはオレのモノでもねぇーし・・・・そもそも、雛森代議士の娘に手だしたお前が言えてギリかよ？デキちまったんだろ？」

「そうそう、聴いてよねぇ新ちゃーん・・・・それがさ、見てよこれかわいｄ」

「先も言ったが、こんなモノクロ写真でわかるか？そもそも、まだ生まれてもいないのに言えるか！」

「新ちゃんのいじわる！？・・・・けどさ、新一・・・お前はそれでいいの？」

「そうやで・・・このままだとオレがアタックしてまうで？それでええのん？」

似たような顔立ちの男が、オレを諭すように言う・・・分かってるさ、そんなこと・・・けどオレの一方通行だけではだめだろう・・・・彼女も呼んでくれないと・・・

・・・・・けど、オレはあの時・・・・・・・・・・

・・・・・志保の一方(おもい)通行をはねつけてしまった・・・・・

「・・・いいんだよ、別に・・・」

新一はグラスに残っていたカクテルを空虚な胃に無理やり流し込んだ。アルコールと酸味の利いた風味が胃を刺激する。この嘔吐感

や胸やけは果たして、生理的なものだけなのか？それとも、・・・・・
胸に去来する何とも言えない想いを酒精と快楽で塗りつぶせたらどれだけ楽になれるか・・・
答の見つからない、不毛で虚しい自問自答に蓋をしてラウンジのガラスに映る人工のランタンの灯りをただ見つめるだけであった・・・・

「志保さん、今晩はどうです？この後、いい感じのバーがあるのですが、一緒に来られますか？」
「白馬君にしては、安易でストレートな誘いね？いいのかしら？結構、イケる口よ、私？」
軽くウェーブのかかった赤茶けた髪をさっと指に絡ませて後ろへ流

す・・・・さりげない所作にも優雅で気品が溢れていて・・・・昔のあの人を彷彿とさせてくれる・・・・やはり、彼女は僕にとっての・・

白馬探が彼女と出会ったのは映画作品での共演だった・・・自分は、志保の恋人の恋敵役を演じたのだ・・・その演技が認められその年の映画賞の賞という賞を独占し、二世俳優という偏見じみたレッテルをも覆したのだ。ただ、白馬自身はよく自覚していた・・・それは、あの時の素の自分をありのままに見せただけで演技などというものとは遠いものだったということを・・・・

過去に縛られるのも悪くはない・・・・いや、今も僕は引き摺っている・・・・けど、今はこの状況に身を委ねたい・・・・

それが、たった一時の安らぎであっても、彼女に向けているものが愛情ではなく哀情であるということを・・・

秀麗な目をつぶり、今浮かんだ考えを瞬時に消し去ると笑みを向ける・・・聡明な彼女にはすでに気付かれているかもしれない。偽りの思慕、偽りの眼差し、偽りの微笑・・・・それでも、いい。

僕は、道化師・・・・操り手は自らの感情・・・・その役は深い哀情・・・・

それから、志保と白馬が交際していることが大衆紙に載ったのはそれから三日後のことだった・・・・

人間、習慣づいてしまったことは判を押したが如くそこには感情の余地も一切いれずただ黙々とこなすことができる。例え、寂寥感に満たされても焦燥感にかられようとも社会という大帝に奉仕する従者となり今日も与えられた仕事を消化する・・・・

そこに生きる価値を見いだせる人もいる・・・ただ、それはほんの選ばれた人間にしか過ぎない・・・やはり、大半はモノな世界に飽き、悩み、絶望し最後は思考を失う・・・・

果たしてこの男は何を思って今洗顔をし、思い人でもそうでもない人間の作る朝食にありつこうとしているのだろうか・・・・それは、過去の陰惨な経験なのかそれとも取るに足らない砂上の虚栄心なのか・・・

穏やかな朝日の中、ダイニングには煎ったコーヒー豆の芳醇な香り、トーストの香ばしい匂い、フライパンの上をはぜる水分の音で充満

している・・・・男は、テーブルの上を一瞥する。昨夜あったはずの大量の資料と校正したての脚本の山、仕事道具でもあり彼女から贈ってもらった唯一の品であるヤード・オ・レッドの万年筆がどこへいったかと一瞬驚いたようだっただが、

「仕事道具なら、あなたの仕事机に置いといたわ。それと、昨夜の議論はちゃんとまとめといたから。ちゃんと目を通しておいてよね。それより、早く朝食を食べて頂戴。本当に遅刻するわよ。」

こうも、自分の足りないところをさりげなくフォローもしてくれるそれにそつ無く何事でもこなせる・・・まるで、自分の欠けた半身であるかのように必要な彼女・・・・でも、

「そろそろ、あなたもアシスタントを雇ったら？そこそこ有名にもなったんだし・・・・」

彼女は呼ばない・・・その声も霧散して意味をなさない・・・・どうして、アイツなんだよ・・・

「もし、必要なら私から紹介するけど―「オイ、どういうつもりだよ？」―工藤君？」

「どうしてなんだよ？なんで、オレの名前を呼ばないんだよ！！オレはここにいるのに―「違うわ！！」―志保・・・？」

気が付いていたらオレは志保の手を思いっきり掴んでいた・・・・白くて陶磁器の様な肌・・・そして小枝細工のように精緻ではかなく壊れそうなほどの腕を・・・・そこは見る見るうちに紅くうっ血する・・・まるで、己の存在を自己主張せんがために・・・それでも、分かっていてオレはやめなかった・・・・・

「・・・・・あなたは、変わった・・・・それがまだ分からないの？」

けど、オレが大事にしたいアイツは・・・・泣きもせず唯じっとオレを見つめていた・・・・

その瞳には、怒りの感情とも悲しみの感情とでもなく・・・・ただ、独り考え苦しみ抱え込もうとしている眼だった・・・・・

「・・・・朝食、冷めないうちに食べて・・・・アシスタントの件は私が妃先生を介して紹介しておくから・・・・・」

気が付いていたら、コーヒーの湯気も消え去り温かみがある白い印象派絵画もどす黒い陰惨とする前衛芸術へと変貌していた・・・・それに一瞥をしため息をするとデスクに整頓された資料を無造作につかみ黒革のくたびれ鞄に詰め込んだ・・・・

そして、オレの気持ちをご丁寧に代弁した冬の寒空のもと飛び出したいった・・・・

Ｓｃｅｎｅ　１．０：現と夢（後書き）

前作に引き続き、またもや見切り発進で・・・・自分の馬鹿さ加減にほとほと呆れるばかりです・・・・

ほのぼのからいきなりのダークシリアス、そこに鬱をトッピングした感じに・・・・

したい、と思っています・・・・

さてどうなることやら?作者である自分が一番緊張感なく、責任感が無いかもしれない・・・

ご意見・ご感想等たくさん待ってまーす!!

Ｓｃｅｎｅ　２．０：堕落　現状維持（前書き）

あーなんか色々やってしまったので取りあえずごめんなさい・・・

Ｓｃｅｎｅ　２．０：堕落　現状維持

固結び・・・という言葉があるように一度結びついた紐同士は、簡単に解けない・・・

結び方には秩序は無く、想いも一方通行・・・けど、大きな力が加わることが無ければ決して解けることは無い・・・

二人の想いを邪魔するものなどはなく、そこにあるのは絡まって解けないという泥沼な状況だけ・・・・

外から見れば、そんな姿は淀み腐りきったものでもあり忌避すべき対象である・・・

でも、バクテリアも存在しない清らかな流れには生物は棲みつかない・・・・

生きるもの全てが、他の存在と共存し依存して絶妙なバランスと多様性を生み出す・・・

人間関係にも清らかなものはない・・・もしあるなら、それは”繋がって”いるという体のいい蜃気楼を見ているにしか過ぎない・・・

今の状況を打破するのか、それとも水を抜いて心中するのか・・・・

案外、この状況は俺にとったら都合のいいことなのかもしれない・・・

Ｐｉｅｃｅ　ｔｏ　Ｐｅａｃｅ　―Ｓｃｅｎｅ　２．０：堕落　現状維持

ｔｅｎｓｅ　ｔｏ　ｒｅｓｔ

～♪

静かでそれでも温かな着信音がなる・・・・”彼女”をイメージした曲だ・・

「あっ、着信ですよ江戸川先生？」

「・・・うん、そうだな・・・・・」

憂鬱と倦怠感がのどの奥で引っかかり何ともいえない不快感を醸し出していた今日この頃

そんな中、彼女からのメールを受け取ったのは打ち合わせに向かう車内の中だった・・・

あの朝から二週間・・・・お互い、急がしいということもあり顔を合わせることは滅多に無かった。いや、正確に言うならば自分がこのぬるま湯からほど遠いそれでもどこか安心感と虚像の充足感を与えていたこの環境を崩したくなかったのだろう・・・・

今、彼女と顔を合わせてしまったらこの関係にも終焉が来るかもしれない・・・

そう、糸のように細くそして先行きなどはるか彼方で霞んで見えないような確率にさえも縋ることはできなくなってしまう・・・・・

所詮、オレはあの時から何も変わっちゃいねぇ・・・・

運命からも、真実からも・・・・・・逃げってばっかだ・・・

ひとり、結末にならない問答がループしていると運転席の彼女がオレに顔を向けてきた・・・

「どうしたんですか？演劇界きってのホープ、江戸川先生が暗い顔なんてねぇ？」

「別に？それより、前の上がったト書きはできたの、まーくん？」

「・・・先生、まさかボクっ娘（ボク）を馬鹿にしていないかい？」

「別に、貴重なサンプルとして重宝してもらっているよ・・・世良真純クン？」

「ほーら、馬鹿にしている！！やっぱり変な目でみている、こーの工藤君のばぁーか」

と、傍目活発で快活な少年・・・・いや、ボーイッシュな”彼女”は左手で巧みにハンドルを捌きながら右手で男を器用に殴る・・・見事な正拳突きだ・・・・

しかし、男はそんな和気藹々（かげき）なやり取りにも慣れているのだろう絶妙な角度から放たれた拳をいとも簡単に交わす・・・・しかし、

「スキありっ！！」

いつの間に左手が、いや憤怒の左拳が男の側面を正確に捉えていた・・・

「Ｏｈ・・・・・少し、やり過ぎちゃったかな？」

男、工藤新一・・・・今日の恋愛運もとい女性運はダントツのワーストのようだ・・・

「・・・・っうううう、天地が揺れる。」

「悪かったって言ってるじゃないですか・・・・その、シンイチ・・・・」

今まで、快活だった彼女もシュンと頭垂れどこかいじらしさを感じさせるものになっていた。その証拠に涙も心なしか潤んでいて、上

目遣いになっている・・・まるで捨てられた子犬そのものだ・・・・・

（いつ、こんなスキルを身につけたんだ？・・・誰だ？シュウさんか？）

男は、つい最近まで妹のように接してきた彼女にどこか感じていた・・・・

それは、仄かに薫る”オンナ”でもありどこか似ている”影”と”妖艶”でもあった。

彼女・・・・世良真純は文才に優れた新一公認の”非公式な”アシスタントだった・・・

非公式なのは彼女がまだ未成年（大学一年生）であること、そして自分の母親の遠縁にあたる人間でもあった・・・・

勿論、このことを知るのは母親と自分、そして彼女の唯一の肉親である売れないクマだらけの俳優だ（シュウ）・・・・

彼女でさえ、知らない・・・・

いつの間にか、彼女はコーヒー缶片手にオレに枝垂れかかり腕をオレの首に回していた・・・そうして瞳がかち合う。彼女の瞳を翡翠やエメラルドに例えるならコイツのはベリルだ・・・・自ら光ることもあれば、外の光でも感化し吸収し輝く両目・・・・

「さっきの着信、志保さんでしょ？」

「・・・・・・」

途端に体が僅かだけだが硬直する。足の裏が強力な接着剤、いや特殊なコンクリートによって固められ抜け出すことができないみたいだ・・・・

粘着質で、その裏にはそこはかとなく背徳感と禁忌を感じとれる・・・

「・・・・なんで、いつも心ここにあらずなのかなぁ？」

「別に・・・」

真純は全てを知って、それでも工藤新一に惹かれていた・・・ただ、肉体は成長しても心の成長は追いつかない・・・でも何とかして彼を振り向かせたかった・・・・

触れ合いも繋がりも、遊びでもいい・・・けど、一緒に同じときを過ごしたい・・・

それが、彼女の想いでもあり願いでもある。・・・そしてそれは、存在意義にも等しい程のもの・・・・それだけに工藤新一という存在に依存していた。

「・・・・ねぇ、今日はダメ？」

「仕事がある・・・・それに・・・・・」

「仕事は編集者との打ち合わせとチェックだけ・・・そんなもの二時間もあれば終わるでしょ？」

媚びるようにでもそこにはただ真っ直ぐな眼差し（おもい）しかなくて、

「それとも、何か予定があるのかい？くどーくーん？暖めてくれないかなぁ？」

「・・・・勝手にしろ・・・・・」

飲みかけの冷めたホットレモンを飲もうとする前に、彼女の形のいい花弁に呼吸を奪われた・・・・

今夜は雪になりそうだ・・・・そう、雲行きから、外の空気から、雰囲気から・・・全身で、五感で季節を、冬を感じていた。

色黒の男・・・・もとい服部平次は台本と睨めっこしていた。今度のドラマのセリフに悪戦苦闘をしていた。それは、現代劇でありしかもセリフは標準語であったのだ。

「あーっこうも東京弁はこないに難しいんや！！ホンマ、頭がどうにかなってしまいそうや！！」

とんがり頭の後頭部をガシガシ掻き毟ると、猪口に残った温くなった熱燗に一瞥をやり遠い目で窓辺に映る風景を眺めていた。

元々、若手では珍しく殺陣や作法の素養があった服部はデビューしてからは専ら時代劇や大河ドラマといった物に出演していた。

芸が古臭い・・・いや、古風で男臭い雰囲気が相まって昨今人気の高い、草食系美男子（快斗くんみたいなヤツ・・・・あぁぁぁ、ファンの皆様物投げないで！！）とは違った”サムライ系”のイケメンとして人気が高いのであった・・・・

なので、どういう訳か現代劇とりわけトレンディドラマみたいな類

は苦手であった。その上にこの男、恋愛経験ゼロ・・・・なので感情移入どころか全て「アホくさ」と片付けてしまう・・・・彼の考えとしては、男女の関係やその他諸々を語るには理屈が通用しない。況してやそのほとんどが感情論になりがちで曖昧で不透明。まぁ、法にそして道義に反しなければいいのではと思うくらいで、けどその為に自らの社気的立場や私財を投げ打ってしまうまでの心意義が理解できない・・・そういうことらしい。

（口では、工藤にあんなことやこんなことゆうとるけど実際さっぱりなんやなぁ～この類の話し・・・）

服部が出るドラマは初回の視聴率がかなり好調だったらしくスタッフや共演者もかなり士気が上がっていた。撮影自体はもう僅かで彼自身の出演も山場に比べれば楽なのだが、台本が直前で差し替え。丁度訂正された箇所が服部の長ゼリフだったのだった。

（けど、男との恋愛が遊びだったオンナが意中の男と一晩寝ただけで、今までの自分に罪悪感を感じるなんてな・・・・ホンマに恋愛は理解の外やわ）

そんなことを考えながら悪友の工藤と、俳優仲間としてそして数少ない異性の親友の志保の今の関係を見るとやはり恋愛を「ヤヤコシイ」の一言で片づけるのは吝かではなかった・・・・

「あいつ等も早い内に年貢の納めどきにした方がええのに・・・」

どちらも真剣に思い遣り、そして想いあっているるのだから・・・
尚更・・・

「・・・・アホくさ。やめやめこないな話、オレにはむかんは・・・・
」

さて、そろそろあの時間やなぁ、仕度せなぁと立ちあがった時男の
携帯が鳴った。

着信：宮野のねぇちゃん

「・・・・噂をすればやな・・・・、もしもし」

服部はこの着信を聞いて、もっと自分がお得意の無鉄砲さでお節介
を焼いていれば、もしくは仲を取り持てばよかったのにと激しく後
悔するのであった。

外は白い一面の雪化粧だ・・・・この中で赤い華でも咲いたらさぞ綺麗だろうよ・・・・

「・・・・っうん・・・・」

気がつけば、いつもの空間。白い空間だ。アイツ・・・・真純と逢うときの・・・・

遠目からシャワーの音が聴こえる・・・・顔を少しずらせばさっきまで感じていた火傷しそうなほどの熱さを持ったあいつがいない。

ルーム内の間接照明のたまゆらな光に視線を合わせ、さっきまでのコトを巻き戻し再生していた。

いつも、積極的。オレを放さんとして必死にしがみつく・・・背中には今頃紅い線が丁度乾いたぐらいだろうか・・・・。まるで、オレの上に自らを残し、更新していくように・・・・

水音が止まり、控え目な物音がしてそのあとシャワールームの扉が開かれる。オレを悩ます、諸悪の根源が湯上りの香りを漂わせ再降臨・・・・

視線がかち合う・・・相手は満面の笑みで身体を自分から寄せてくる。すり寄って顔をオレの胸に乗せる・・・・まるで子犬だな・・・・

ただ、こいつは一人が淋しく、不安で、どこか頼れる存在が欲しいからオレといるだけ・・・・・いい人が見つかればその内、本当におさらばだろう・・・・

両親のいないコイツにとってはあの売れない俳優が唯一の肉親・・・だから、家族を求めたがる節がある。こいつには妹以上の感情は湧かない・・・でも、抱いた・・・・後ろめたさのある訳でもなくこいつの一途な思いを利用して・・・・どこかアイツに似ている空気を纏ったこいつを・・・・

けど、そんな大人の浅薄な考えをこいつは見通しているに違いない・・・それでもこいつは益々離れない。

この罪は一体どうなるんだ・・・・・

雪の真ん中に真っ赤な緋色の薔薇が鮮やかに、艶やかに、儚く、咲いていた・・・・・

まるで、死にゆく自分への手向けのように・・・・・

その頃、建物の外は緊急車両の往来や人だかりで騒然としていた・・・

無理もない杯戸シティホテルの屋上で若い女性が血まみれで発見されたのだ・・・・

女性の名前は、宮野志保・・・・当代きっての若手実力派女優・・・・

そう、工藤新一が今いるホテルの上だった・・・・・

Scene 2．0：堕落　現状維持（後書き）

嗚呼ーやってしまった・・・科白むずかしい・・・世良ちゃん、ハットリ難しい・・・・

即席で作った自分にも恥ずかしい・・・

感想・批評・ご意見待ってマース・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9188z/

Piece to Peace

2012年1月5日21時52分発行